

## 一九四〇年 〆幻の東京オリンピック、と横浜専門学校

大坪潤子

### はじめに

二〇二〇（令和二）年三月二十四日、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の世界的な感染拡大を受けて、四か月後の七月二十四日から開催予定だった東京オリンピック・パラリンピック大会「[TOKYO2020]」の延期が発表され、続く三月三十日には、IOC（国際オリンピック委員会）がその日程を二〇二一（令和三）年の七月二十三日から（オリンピック）・八月二十四日から（パラリンピック）と決定した。大会の開催延期は、オリンピック・パラリンピック史上初のことであった。

また、東京都の小池知事は三月二十五日夜に週末の外出自粛を呼びかけ、神奈川県黒岩知事も翌日に同様の措置をとった。既に全国の小中学校の休校措置や

大規模イベントの中止決定などは次々になされていたが、未知のウイルスによって変わりゆく日常が、加速度的に自覚されていく数日間であった。

その後、外出自粛要請などからなる「新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言」が四月七日に七都道府県に発出、四月十六日には全国に拡大された。緊急事態宣言は五月二十五日に解除されたものの、減少を見せていた国内感染者数は大都市圏を中心に再び増加することとなった。

そして二〇二一年二月現在、第三波とされる感染拡大を受けて二回目の緊急事態宣言が発出中である。世界的にも感染の終息は見通せず、「[TOKYO2020]」開催も、定かとは考えられない状況にある。神奈川県大学においても、二〇二〇年一月末に新型コロナウイルスに関する緊急対策本部を立ち上げて対応を進め、段階

的に卒業式や入学式の中止を決定、そして四月には、構内への八月までの立入り禁止と講義をオンラインで行うことを発表した（詳細は本誌特集年表参照）。十月からの開催を予定していた大学史特集展示も、七月末に、後期も学生が原則入構できないことが決定したため開催中止となった。展示テーマは「一九四〇の幻の東京オリンピック」と横浜専門学校であった。

本稿は、その展示に替えて、かつてのオリンピックと横浜、そして横浜専門学校の動きを追い、現在の我々の状況を俯瞰する一助とするものである。

## 一、幻の東京オリンピック

現在、二〇二一年への開催延期が決定している「TOKYO2020」は、東京における二回目のオリンピックとなる。前回の東京オリンピックとしてその興奮を語る経験者も多い、この国で初めてとなったオリンピックの開催は、一九六四（昭和三十九）年十月（パリンピックは十一月）のことである。

しかし、当時を直接知る者は少なくなつたにせよ、その前に一度、東京での開催が決定されたオリンピックがあった。大会招致に成功したものの、のちに返上

することとなつた、一九四〇（昭和十五）年の幻の東京オリンピックである。

オリンピックの初めての東京招致は、当時の東京市長永田秀次郎、また日本学生陸上競技連合初代会長の山本忠興らによつて一九三〇（昭和五）年前後に構想が立ち上がった。関東大震災の復興事業を進めていた永田市長は、きたる一九四〇年の紀元二千六百年記念行事としてオリンピック開催を位置づけていた。

一方、このオリンピック招致活動に先んじて、一九二九（昭和四）年から博覧会倶楽部（会長…古市公威）により日本での万国博覧会（以下万博）開催が叫ばれていた。翌年には、（第一次）世界大戦終結二十周年、関東大震災十二周年を名目とし不況打開をめざして、一九三五（昭和十）年四月から七か月間、東京の芝浦埋立地と横浜地区で開催することを計画し、古市が浜口雄幸首相他各大臣に要請した。この計画の立案には、東京府や東京市、東京商工会議所などと並んで神奈川県、横浜市や横浜商工会議所、横浜実業組合連合の代表者が加わっている（古川、六九―七六頁）。

この万博開催計画に対しては、不況などの理由で早々に一九四〇年への延期を求める声があがった。第

二会場の設置予定地だった横浜市も、財政悪化により延期を強く主張した（『東京朝日新聞』一九三〇年九月十一日付朝刊）。一時計画中断となった万博は、一九三二（昭和七）年以降、阪谷芳郎が中心となって動きが再燃、「皇紀二六〇〇年奉祝記念事業」の一環として位置づけられていく。ここでの会場予定地は、東京の月島を第一会場に、横浜の山下公園も含まれ、海洋館、水産館、水族館の設置が計画されていた。

一九三一（昭和六）年十月二十八日、東京市会で「国際オリンピック競技大会開催に関する建議」が満場一致で採択された。大会の主会場には、駒沢ゴルフ場の跡地、および明治神宮外苑を充てることとした。次いで十二月には東京市、大日本体育会などを中心として第十二回オリンピック東京大会組織委員会（会長・徳川家達）が結成され、翌年から本格的な招致活動がおこなわれた。既にローマ（イタリア）、ヘルシンキ（フィンランド）、バルセロナ（スペイン）、ブダペスト（ハンガリー）、ダブリン（アイルランド）、アレキサンダーリア（エジプト）、ブエノスアイレス（アルゼンチン）、リオデジャネイロ（ブラジル）、トロント（カナダ）の九都市が十年來の候補地となっており、また、ヨ

ロッパからの遠さや夏季の高温多湿という条件が不安視され、当初東京の選出見込みは低いとされていた。

しかし、激しい招致競争の末、開催都市はローマ、東京、ヘルシンキの順に絞られ、最終的にローマが辞退したことにより、一九三六（昭和十一）年七月三十一日、IOC総会の投票で、第十二回オリンピック（一九四〇年）の東京開催が決定したのであった。これはアジアにおける初のオリンピックでもあった。これはに衝撃を与えた二・二六事件が起きてから約五か月後の、東京を沸かせる決定であった。

だが、招致決定から一年足らずの一九三七（昭和十二）年七月七日に日中戦争が勃発する。欧米各国から日本へのオリンピックボイコットの動きや批判、さらに国内はオリンピックの開催どころではないという世論が高まり、ついに一九三八（昭和十三）年七月十五日、万博の延期（実質的な中止）決定と同日、大会開催権をIOCへ返上するにいたる。これにより第十二回オリンピックは、招致競争の際に東京の次点であったヘルシンキで開催とされたものの、第二次大戦勃発により、ついには大会自体の中止が決定された。

## 二、東京オリンピックと横浜

では、この一九四〇年の東京オリンピック開催に関して、横浜ではどのような動きがあったのだろうか。

横浜市では、オリンピックの東京開催が決定した二日後の一九三六年七月十七日に、横浜の開港記念会館に市の助役や横浜高等商業学校教授、横浜政財界の有力者らを集め、オリンピック開催について意見交換の座談会をおこなっている。

この場では、貯木場（新山下）や小港（本牧）へのヨットハーバー誘致、滝頭（磯子）へのホッケー会場を含む総合グラウンド建設、ボート競技のための鶴見川改修、省線の延伸を見越しての根岸へのトレイングラウンド建設や、本牧や根岸、あるいは保土ヶ谷児童遊園地等にオリムピック村を建設する、といった意見が出され、最後に渡邊利二郎が「いろいろの御意見もありますが一つヨットハーバーだけは横浜に持つて来るといふ決議をしては」と締めて満場の拍手を得た（『東京オリムピック・浜の対策』『横浜貿易新報』一九三六年八月一日付）。

横浜の有力財界人の一人である渡邊は当時、横浜専

門学校の理事や奨学会顧問、そして教員や陸上競技部の部長もつとめていた。自邸のテニスコート付の庭を横浜女子商業学校の第二運動場として貸してもらい、スポーツへの関心は人一倍高かったと考えられる。

また、保土ヶ谷児童公園へのオリンピック村建設などを展望したのは、戦後に横浜市長となる平沼亮三である。当時大日本体育協会の副会長をつとめていた平沼は、一九三六年三月のIOCラトウール会長来日時、視察に同行し自宅に招待するなどオリンピックの東京招致に重要な役割を担っていた。また、一九三六年八月からのベルリンオリンピックには日本選手団団長として参加、そして同年十二月に東京オリンピック組織委員会が結成されると、これに加わっている。戦前戦後を通してスポーツの普及に尽くした、横浜の代表的な人物である。この平沼もまた、奨学会顧問として横浜専門学校に関わっていた。

オリンピックの開催は、万博開催とともに、関東大震災後財政が窮乏していた横浜市にとって「市況好転の機運」でもあった。一九三六年九月、当時の立憲民政党の機関紙『市政春秋』は、万博の第二会場として根岸の海を二十五万坪埋め立て、閉会後は住宅地として

売却する案があること、オリンピックはヨットハーバーを新山下町の貯木場脇に建設することが「最早動かすべからざる事実となってきた」と伝え、諸事業のために巨費が投じられ「稀に見る大活気を呈すること疑いない」とした。また「之れに依つて落される金も僅少ではあるまい」と、現在でいうインバウンド需要への期待も述べ、万博とオリンピックを「好機」と捉えている（『市政春秋』第十七号、一九三六年九月二十日）。「TOKYO2020」招致から決定の頃を彷彿とさせる内容である。

この後、予算案をめぐる難航を経て横浜での競技開催が決定したのはやはりヨット競技であった。一九三八年二月八日に正式決定し、貯木場北側でのヨットハーバーの建設に向けて動き出したが、同年七月十五日に東京オリンピックの返上が閣議決定されたため、ヨットハーバー計画も一旦中止となった（のちに計画を大幅縮小し一九三九年に起工、一九四一年に竣工）。

一方、鶴見川下流にボート競技場を誘致する計画は、計画の前提となる鶴見川の国庫改修費が一九三七年予算案に盛り込まれなかったことから挫折、開催地は埼玉県戸田村（現・戸田市）に決定した。また、磯子

区滝頭における総合運動場の計画も、建設費が得られず実現しなかった。ただしこの計画は紀元二六〇〇年記念事業・岸根総合運動場計画として引き継がれ現在の岸根公園につながり、総合運動場については戦後に三ツ沢公園内での各種競技場整備という形で具現化する。（松本、三頁）。

先に引いた『市政春秋』の一九三八年一月における論調は、国家の非常時におけるオリンピック開催を排斥する世論が一時あり、これが再燃する可能性を踏まえた上で「斯うした主張に対しては、非常時なるが故に体力と士気を鼓舞する運動競技が肝要だといへば沢山だ」、さらに、オリンピックのために多数が来日して直接日本の状況を見るのが戦局での対外宣伝においても有効であること、国民体育の改善に関心がおかれる中「吾々の期待するオリンピックは体育の世界的英雄を発見すること」、また、競技にかかる支出について批判があるがそれらは国内での流通であること、そして、「況んや競技と共に渡来する外国人が、五万十万を数へて、一人分一千円と仮定すれば、五千万乃至一億円の大金が日本を潤ほす。日本にとりて、時節がら此上もなき福の神が訪れるのだ」として、

多方面に及ぶ見地を挙げてオリンピック開催反対論を斬っている（『市政春秋』第三十三号、一九三八年一月二十三日）。

しかし結局のところ横浜も、東京オリンピック開催を最後まで推し進めることはできなかった。

### 三、オリンピックと横浜専門学校

それでは、この東京オリンピックは、神奈川大学の前身である横浜専門学校に何らかの影響があったのだろうか。

まず、東京オリンピック以前のオリンピックと横浜専門学校の関係を見てみよう。一九二八（昭和三）年の学校創立から一九四〇年までに開催されたオリンピック大会は、一九二八年のアムステルダム（オランダ）大会（第九回）およびサンモリッツ（スイス）大会（冬季第二回）、一九三二年のロサンゼルス（アメリカ）大会（第十回）およびレークプラシッド（アメリカ）大会（同三回）、一九三六年のベルリン（ドイツ）大会（第十一回）およびガルミッシュ・パルテンキルヘン（ドイツ）大会（同四回）の計六大会である。

いずれの大会も、選手としての直接的な参加だけで

なく、間接的にも参加を示す資料は見出せない。

では当時の横浜専門学校、また横浜専門学校生にとって、オリンピック全般、さらに東京でのオリンピック開催は関心の薄い事であったのだろうか。

一九二八年に始まる横浜専門学校は、東京オリンピック開催予定の一九四〇年でようやく創立十二年目を迎える、まだ歴史の浅い学校であった。しかし、運動部の活動は早い時期から盛んであり、専門学校令に基づき専門学校として認可された一九二九（昭和四）年には、運動系の課外活動として野球部、籠球部、（陸上）競技部、蹴球部、柔道部、庭球部、剣道部、相撲部が創部されており、翌年には水泳部、山岳部も承認された（文化、学術系は一九二九年では珠算部、弁論部、雑誌部、音楽部、英語部）。

創立者米田吉盛は柔道の心得があり、著名な指導者を招くなど各運動部の活躍に期待を寄せていた様子がみられる。のちに神奈川大学の学生はスポーツの祭典としてのオリンピックに選手やボランティアとして関わっていくが、この時期にその素地が遠く育まれているのかもしれない。

さて、当時の学生新聞である『横専学報』に初めて

東京オリンピックに関する記事が現れるのは、一九三七年五月のことである。「五輪の刺激に奮起 雨中に輝く記録樹立」と題して、横浜市立横浜商業高等学校で開催された第三回陸上競技選手権大会の結果を伝えている。この大会は同年初開催予定の七大都市対抗陸上競技大会（実際の開催については不明）の予選を兼ねており、「四年後に迫る東京オリムピック大会」の刺激で「選手は何れもハリ切つて出場」と表現した（『横専学報』第六十二号、一九三七年五月二十五日）。この大会の結果、都市対抗には横浜専門学校から一五〇メートルに金三植、ハンマー投げに安田國雄の選出が記されている。ちなみに金は横浜専門学校が箱根駅伝に初参加した一九三六年を皮切りに、専修大学に進み卒業するまで箱根駅伝に出場し続けた名ランナーであったが、大学卒業後の消息は不明である。

翌一九三八年四月時点で、横浜専門学校の運動部は前述の八部に弓道部、馬術部、射撃部、ラグビー部、卓球部、短艇（カッターボート）部が加わった計十五部となっていた。馬術部や射撃部で配属将校や教練担当教員が部長や顧問をつとめているのが注目される。

さらに翌五月の『横専学報』は、「五輪の刺激にヨット部創設」と題してヨット部の新設を報じている（『横専学報』第七十二号、一九三八年五月二十五日）。記事本文では「各運動部の積極的進出を校友一千の力強い後楯に、着々全国制覇の大業に邁進する十幾部の運動部の飛躍に刺激され」とあり、必ずしもオリンピックの直接的な刺激とは読みとれないが、やはりこの年に横浜がオリンピックのヨット競技開催地と決定したことと無関係ではないだろう。横浜市会でヨット港築造関連予算案が可決したのは、四月二十二日のことである。

ヨット部の部長は英語担当教授の亘理俊雄で、委員四名、部員が三十七名と新設の部としては目立つ人数となっている（同紙面によれば、この時柔道部と剣道部部員は各二十数名、陸上競技部が四十数名である）。末尾に「五月十一日より本牧海岸に於て練習開始」とあることから、既に実際の練習に向けた準備はある程度は整っていたと考えられよう。

しかし、間接的にせよオリンピックの影響を受けて新しい部が創設される一方で、一九三七年七月に始まった日中戦争の影は日々確実に濃くなり、『横専学

報』においても、「運動」は体育の向上や身体の養成、精神の鍛練を目的とすることを、執拗なまでに前面に押し出すものになっていく。

また、一九三八年六月九日には文部省通牒により学生・生徒の勤労奉仕が義務づけられ（「集団的勤労作業運動実施ニ関スル件」）、年に五日、長期休暇の間の奉仕作業をおこなうこととなった。ただしこの時期の勤労奉仕はまだ授業時間を除いての限定的なものであり、自分たちにとつての課外活動環境の改善につながるものもあつた。例えば野球部は勤労作業として新設中の総合運動場の一部をグラウンドとして整備した。なお同部は一九三九年の全国実業専門学校優勝野球大会で全国優勝を果たしている。

ところで、東京オリンピックとの直接の関係は現在のところ見出せないが、当時は語る何枚かの興味深い写真が横浜専門学校の卒業アルバム等のにこさされている（文末参照）。

写真1は、元のタイトルに「オリンピック船」とあり、船名を拡大すると「T A I Y O M A R U」と判読できる。これは一九三二年のロサンゼルスオリンピックの際、第二陣の選手団（男女飛込、水球、前畑秀子

ら女子競泳）を載せて六月三十日に横浜港を発った「大洋丸」である。オリンピックへの「出口」として、また海外からの選手や観客を招く「入口」として、横浜港はまさに玄関口であつた。

写真2は、映画館入口（切符販売窓口）である。おそらくは横浜専門学校生が足繫く通つた伊勢佐木町界隈の映画館であろう。画面上方にオリンピックのマークがあり、映画の内容を示すものかどうかは判然としない。一九三七年三月の卒業アルバムに収められているので、示すものは一九三六年のベルリンオリンピックだと考えられる。

そのベルリンオリンピックは、ナチス政権の対外宣伝に利用されたものとして知られるが、このオリンピックの記録映画もまた、政治的な非難はあれ、その芸術的完成度はあまりに有名である。レニ・リーフェンシュタール監督によるその映画『オリンピック』（第一部『民族の祭典』、第二部『美の祭典』）は、一九三八年に封切られ、ヴェネツィア国際映画祭で最高賞を獲得、日本国内でも一九四〇年度に大ヒットしキネマ旬報外国語映画部門で一位となつた。写真3はその『オリンピック』（右下角）と『民族の祭典』（右上、

『美の祭典』（下段左から2点目）を含む映画ポスターがカラーージュされた、映画研究会と写真研究会のページである。写真4は野球部（当時「野球班」）の学生の部屋（おそらく寮内）で、机の前に『オリンピア』の大きなポスターが貼られている。当時の横浜専門学校生にこれらの映画が支持されていたことを示しているだろう。

「オリンピック」は、実は意外なところでも横浜学校生の目にふれていた。戦前は「銀ブラ」と並んで「伊勢ブラ」と呼ばれた繁華街・伊勢佐木町の入口、現在のJ・R 関内駅近く（尾上町五丁目）に、東京オリンピック招致決定後「オリンピック」というレストランビルが建った。横浜の老舗書店・有隣堂の故松信泰輔氏によれば、オリンピックの受け入れのために、銀座にオリンピックという大衆的な立派なレストランができて成功し、それが尾上町で開店した。このレストラン「オリンピック」は、のち「関内食堂」、一九四四（昭和十九）年二月あたりから雑炊食堂、戦後は進駐軍専用のキャバレー、また、「メリーウイドー」というサロンへと変わっていったということである（松信、二六頁）。

ただし、おそらく一九四五年頃までは「オリンピック」の看板は残っていたとみえ、「オリンピック」を背にした学生たちの姿が卒業アルバムに複数現れる（写真5、写真6）。

「幻」となった東京オリンピックではあったが、そこに向けた思いのいくつかは形となって、戦前戦後の横浜に在り続けたのであった。

### おわりに

二〇二〇年度の大学史特集展示は、開催予定時期の約一年前に企画立案した当初の内容はオリンピックとは関係がないものだった。

年の初めは予想だにできなかった新型コロナウイルスの感染拡大により、予定していた企画のための市内各所での学生との写真撮影はとも叶う状況ではなくなり、改めて、八十年前のオリンピックと向き合うこととした。しかしはじめに述べたとおり、そのオリンピック関連企画も結局展示には至らなかった。三号館展示ホールは、コロナ感染拡大に関わらず図書館の改修工事による代替施設となるため、二〇二一年度から当面の期間、展示を行えないことが決まっていた。今回、

甚だ不十分ではあるが、改装前の最後の展示となるはずだった内容を、展示では示しきれなかったであろうところも含めて追ってみた。幻の東京オリンピックに関する、幻の展示の報告である。

〈参考文献〉

- 「オリムピック選手消息片々」『水泳』第十三号、日本水上競技連盟、一九三二年八月
- 「市況好転の機運」『市政春秋』第十七号、市政春秋社、一九三六年九月
- 「座談会 オリムピックを迎ふ 一月八日」『市政春秋』第二十一号、市政春秋社、一九三七年一月十五日
- 「オリンピック近づく」『市政春秋』第三十三号、市政春秋社、一九三八年一月二十三日
- 松信泰輔（講演録）「占領下の10年・伊勢佐木町界限―横浜再生への原点―」〈横浜学々を考える会 公開講演会 一九八六年五月十七日 県立神奈川近代文学館〉※発行詳細不明
- 横浜市総務局市史編纂室編『市政春秋 横浜市史Ⅱ研究資料集』横浜市、一九九一年
- 橋本一夫『幻の東京オリンピック 1940年大会 招致から返上まで』日本放送協会出版会、一九九四年
- 古川隆久『皇紀・万博・オリンピック 皇室ブランドと経済発展』中公新書1406、中央公論社、一九九八年

- 松本洋幸「東京オリンピックと横浜①」『市史通信』第十八号、横浜市史資料室、二〇一三年十一月三十日
- 日本オリンピック・アカデミー監修「3つの東京オリンピックを大研究① 1940年まぼろしの東京オリンピック」岩崎書店、二〇一八年
- 大坪潤子「渡邊利二郎」『神奈川大学人物誌 横浜専門学校編』学校法人神奈川大学、二〇一八年
- 澤木武美「学生・卒業生の活躍」『神奈川大学人物誌 横浜専門学校編』学校法人神奈川大学、二〇一八年
- 小林哲夫「大学とオリンピック 1912―2020 歴代代表の出身大学ランキング」中公新書ラクレ704、二〇二〇年
- 川口好孝「神大の歴史48 1964年、五輪イヤーの青春」『宮陵会誌』No.69、一般社団法人神奈川大学宮陵会、二〇二〇年四月



写真4 火鉢の前の森島氏  
1942年9月卒 野球班卒業アルバム

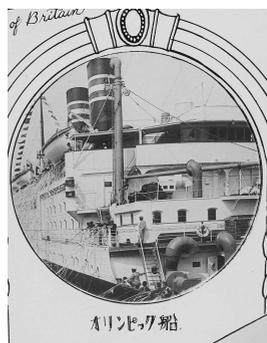


写真1 「オリンピック船」  
1933年3月卒 貿易科卒業アルバム



写真5 吉田橋からオリンピックを望む  
1940年頃



写真2 映画館切符売場  
1937年3月卒 貿易科卒業アルバム



写真6 馬車道自動車乗合場とオリンピック  
1945年9月卒 高等商業科B組卒業アルバム



写真3 映画研究会・写真研究会(部分)  
1941年12月卒 高等商業、貿易、法学科卒業  
アルバム

“幻の東京オリンピック” 関連略年表

西暦	和暦	月	事 項
1928	昭和 3	4	横浜学院(のちの横浜専門学校、神奈川大学)開校
		7	アムステルダム(オランダ)で第9回オリンピック開幕
1929	昭和 4	10	東京市長永田秀次郎、来日した国際陸上競技連盟会長エドストロームにオリンピック東京開催の希望を述べる
1930	昭和 5	6	東京市長永田秀次郎、皇紀2600年となる1940年にオリンピックを東京市で開催したい意向を述べる
1931	昭和 6	9	(満州事変)
		10	東京市会で国際オリンピック競技大会開催に関する建議が満場一致で採択
1932	昭和 7	5	(5.15事件)
		7	ロサンゼルス(アメリカ)で第10回オリンピック開幕
1936	昭和11	1	横浜専門学校陸上競技部、東京箱根駅伝競走初参加
		2	(2.26事件)
		3	IOC会長アンリ・ド・バイエ=ラトゥール来日(横浜入港)、準備状況の視察に平沼亮三同行
		7	IOC総会で第12回大会の東京開催を決定
		8	ベルリン(ドイツ)で第11回オリンピック開幕
		12	第12回オリンピック東京大会組織委員会結成
1937	昭和12	7	(日中戦争勃発)
		11	(日独伊防共協定調印)
1938	昭和13	4	横浜専門学校、ヨット部創部
		4	(国家総動員法公布)
		7	(文部省、大学に学徒動員を要請)
		7	商工省、万国博覧会の延期を決定/厚生省、第12回オリンピック東京大会の延期を決定
		7	政府、オリンピックの返上を閣議決定
		7	東京市オリンピック委員会、大会中止を承認/組織委員会、東京大会をIOCに返上
1939	昭和14	9	(第二次世界大戦開戦)
		11	東京市会でオリンピック委員会の廃止動議が満場一致で可決
1940	昭和15	4	ヘルシンキ、第12回オリンピック大会の放棄を宣言。同大会中止となる